

高等学校の実践報告Ⅱ

1 いじめ事案に対する組織の実態・課題による目標設定

いじめ事案に対する 組織の実態	目標 (目指す組織像)	いじめ事案に対する 日常的な課題
・いじめ事案に対応した経験があまりない。 ・いじめに特化した研修の機会がほとんどない。 ・「いじめ」と教員が認識せず、組織で対応できていない事案がありうる。	・教員が「いじめ」の捉え方について共通認識をもち、未然に防止する方法や、早期発見、情報共有、報告、判断、対応、役割分担をする方法について、共通理解を図る。	・過去数年間、深刻ないじめ事案が起きていないため、「この学校ではいじめは発生しない」と思い込みやすく、早期発見を難しくしている可能性がある。 ・職員がいじめ対応に慣れていないため、事案が発生した場合に、早期対応ができない恐れがある。

2 研修のねらい（実践前）

【ねらい（研修を通じて伝えたいこと・組織に期待すること）】※箇条書き	時間の目安
・教員同士にも、「いじめ」に対する考え方に個人差があることに気付く。 ・情報交換する前と後では、見立てが異なる可能性があることに気付く。 ・立場の違う教員は異なる情報をもっている可能性があり、日頃から情報交換をしたり、情報交換できる関係を築いたりする重要性を理解する。 ・組織的対応をするために必要な教員同士の人間関係を深める。	60 分

3 研修の実践

実施日	機会（職員会議・担任会など）	活用事例
7 月 21 日 水曜日	初任者及び参加希望者の合同研修会	事例 5 (高①)
実施時間	参加者	
13:00～14:15 (75 分)	校長、教頭、教諭 12 名 計 14 名	

4. 工夫したこと（独自性）

- ・グループワークの際、参加者の前に、「担任①」「学年主任」などの担当名を表示し、誰がどの役割であるかを互いに一目で分かるようにした。
- ・パワーポイント資料を加工した。準備された資料では、研修の前半にまとめてワークの説明をし、後半にワークの実践を行うことになっている。説明とワークの時差を減らすため、「目的➡ワークⅠ説明➡ワークⅠ実施➡ワークⅡ説明➡ワークⅡ実施…」に変更した。
- ・グループメンバーの性別、年齢、所属学年がばらばらになるようにした。日頃、接点のない教員同士が同じグループになることで、より多くの気づきを得たり、組織力を高めたりすることを期待した。
- ・ファシリテーターとして、リラックスした、穏やかな雰囲気になるように心がけた。
- ・記録者は研修開始後に各グループで決めてもらった。記録者用資料をその場で渡すこととなったが、記録者としての役割がしっかり果たされて問題はなかった。

5. 実践して気が付いたこと（成功点と改善点）

- ・管理職2名が、自主的に参加された。管理職と他の先生方が意見交換する様子は、理想的な姿に思われた。
- ・「見立てる力」の研修と「対応力」の研修の両方を実施する場合は、それぞれ異なる事例を用いて実施した方がよい。同じ事例を使用すると、2回目の研修において、事例の先を見通せてしまうため、参加者の意欲が低下するように思われる。
- ・司会者は事前に依頼したが、研修の目的が理解されていれば、司会者はいなくてもよいと思われた。

6. 参加者の声（『個人の振り返りシート』より）

- ・具体的な事例で話し合うことで、「判断の観点」「深刻化のリスク」を自分の中に落とし込むことができた。
- ・同じ職場で働く教員でも、考え方に違いがあることに驚いた。
- ・情報の受け取り方が人によって違うので、しっかりした共通認識をもつべきである。
- ・各々の立場の初期判断と自分の初期判断で違いがあった。いろいろな情報を受け取った結果、判断に迷う場面もあった。立場によって、もっている情報や考え方が違うと感じた。
- ・さまざまな立場の先生の情報や考えを共有することによって、初期判断が大きく変わった。情報が偏っていたり、少なかったりすると適切な判断ができないと感じた。
- ・自分一人の情報では偏りがある。他の先生方と情報共有することで初めてその偏りに気づき、いろいろな見方をすることができ、初期判断も変化した。
- ・心身のサインは出ているが、本人の訴えがないので、個人としての初期判断が変わることはなかった。
- ・話し合いを通じて、情報を多角的に理解でき、主観的判断を客観的に考え直すことができた。
- ・グループで合意形成を行うことの大変さと重要さを感じた。一人ではなく、総合的に考えることが重要。
- ・生徒を思う気持ちがあるからこそ、意見がぶつかった。実際の事案の場合、情報を交換しながら、同じ方向を向いていくように調整をすることが大切だと感じた。
- ・合意形成のためには話し合いが欠かせない。客観的な認識ができなければ、事案に対応できない。
- ・生徒が他の教員にしか本音を話していない状況を常に想定するべきだと思う。
- ・本人の訴えが重要だが、なかなか言えない生徒もいるので、サインを見逃さないようにしたい。
- ・実際の学校生活では、教員同士が話し合える場は限られており、教員が見逃している事案もあるかもしれないと感じた。普段から生徒の観察に努めていきたい。
- ・個人の主観によって、間違った判断をする可能性が高いので、チームで動くことが重要だと感じた。
- ・状況や被害者本人以外の会話などからは事案が深く理解できない。被害者本人の行動や心を理解しようとすることで、判断が変わった。情報収集と整理が重要だと感じた。
- ・チームの意見を冷静に聴き、整理する難しさを感じた。
- ・いじめの軽・重によって、対応はどう変わってくるのだろうと新たな課題をもつことができた。
- ・いろいろな先生と協力することが大切。誤った判断をすると余計にさまざまな人を傷つけてしまう可能性がある。
- ・時間をかけて相談しても、「いじめ」と断定できるかどうかは迷いが生じた。実際の場面では、「いじめ」「いじめではない」と決めつけて動くのは危険であり、慎重な対応が必要だと思った。

7. 考察（感想、成果、今後の課題や組織への期待）

グループワークで役割があることで、経験年数にかかわらず、全ての先生が積極的に発言していた。互いの考え方や人柄を知るとは、組織力向上につながっていくと思われる。また、教員同士が違う考えをもつことに気づき、意見を一致させていく難しさとその重要性を体験できる本研修は有意義であると感じた。1回限りで終わらず、このような研修を今後も継続していくことが望まれる。